

YKK 健康管理センター

正会員 大野 秀敏 君
正会員 吉田 明弘 君

黒部平野には広大な敷地をもつ YKK 黒部工場がある。生産ラインの海外移転による拡大の世界・社会情勢にあって、この基幹工場はこれまでの巨大集中から拡散縮小へと状況が転換され、巨大工場の敷地に空きが生まれた。その社会状況が環境の再構築をうながし、土地の状況が水はけを工夫した森と植物を育むプロジェクトを生む。設計者は森のランドスケーププロジェクトを計画し、その中に今回の作品を位置付けている。

ここでは将来成長する森の中に、ボイドである矩形の輪郭による「ルーム」がつくられる。ボイドである「ルーム」は、森と同じく建築が境界となり、芝のフィールドと森と建築によるランドスケープが形成される。ゆえにこの建築は、育まれる森とともにルームの輪郭をつくる配置形状となっている。その輪郭をなす壁面は、メタルラス型枠を使い、それを仕上げとし、錆が時間とともに自然と同化を見ようとする。このコンクリートの壁は触感的であり、なんとも魅力的である。コンクリートであるのにも関わらず、藁を混ぜた土壁のような感触と印象がある。ここにも耕し構築するアースワークを見ることができよう。

この壁と空の境には、白い屋根が雲のごとくふわりと浮く。連続したハイサイドライトにより形づくられた屋根と壁が分節し、建築は浮遊感と水平性の風景の要素となる。そしてランドスケープを生んでいる。軸線による空間形成も見事である。アプローチ軸の塀や壁に沿って貫通する見通しをもつ。3つの廊下でも突き当たりは開かれ、外への光の軸線が通り気持ちよい。診療室にあってもハイサイドライトによる空間の広がりと外部の自然が目にする患者の気持ちの開放感を大切にしている。

ランドスケーププロジェクトが、状況の中で綿密にそしてダイナミックに描かれ、その概念から透過された境界としての建築は分節化し、その分節された間をさわやかに流れる空気の空間化による建築である。加えて設計者のダイナミックな概念と触感的なものづくりの感性が反映された美しい作品である。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。